



この世界の平均寿命を 頑張っ**て**伸ばします。1

α L P H α L I G H T

まさちち
Masachichi

AlphaPolisライオン文庫 



女神エリル

異世界アルドを管理する、
いろいろ残念な女神様。

ギルマス(本名:ウスベル)

冒険者ギルドのギルドマスター。
ムキムキの筋肉ダルマ。

トラン

孤児その3。おとな
クールで、ちょっと大人びた少年。

ハルナ

孤児その2。
優しく面倒見の良い女の子。

若様

謎のイケメン王子様。
ヒデノブに興味を持っている。

ミラ

孤児その4。謎の多いエルフの少女。
自分の能力にまだ気づいていない……

ヒデノブ

本作の主人公。
手に入れた回復魔法と診断スキルで、
この世界の平均寿命を伸ばすべく奮闘する。

ゲン

孤児その1。やんちゃで仲間思い。
孤児たちのリーダー的存在。

主な登場人物

characters

1 プロローグ

「はい、いらっしやいませ」

そんな元気な声のしたほうを向くと——目の前にもものすっごい美人さんがいる！

金髪ロングで優しい笑みを浮かべていて、瞳の色は髪と同じゴールド。その瞳を見てみると吸い込まれそうになる。

着ているのは、白いドレスのようなゆつたりとした感じの服。ゴールドの髪と白いドレスのコントラストのせいかな、何か神秘的な存在に見えた。

「胸でかつ、うむ、うむ、ごう~~~~か~~~~く~~~~！ つて……ん、頭の中で考えたことが口から出てる、あれ？」

勝手にしゃべってしまい戸惑っている、美人さんがニコニコしてこっちをを見る。

「あ、終わりました？ じゃ~まず自己紹介からしますね~」

「えっー、スルー？ そこスルーしてくれるの？ ……胸でかつて口走ったのに。助かる……って、また声に出てるし……」

美人さんは、相変あひかわらず完璧かんぺきな営業スマイルを向けていた。

「私は地球の管理めんぎをしている女神めがはです。初めまして田中英信たなかひでのぶさん。心の声がダダ漏もれなのは、ここがそういう部屋だからです」

「ん？ 何で俺の名前知ってんだろ？ 会ったことあるかな？ あと、そういう部屋って。また、声に出……もういいや……」

あきらめることにする。

「フフフ、そういう部屋とはそういう部屋のことです」

答えになっていないんだけど。

目の前の美人さんは置いていて、周囲を見わたしてみる。

うん、一言で言い表せる。

何もないのだ。周りまわりは真っ白で、遠くに地平線が見える。ぐるっと360度同じ光景。

「部屋ですらないな」

また勝手に、考えていることが口から出た。

もうこれは気にしない。

「フフ、ここはですね。貴方あなたがたの言葉で言うと、審判しんぱんの部屋……の、手前の部屋ですかね？」

「いや、ね？ って聞かれても困るんですが……」

こちらの戸惑いをスルーして、女神様はグイグイ来る。

「まず、最初に伝えておきたいのですが、貴方あなたはお亡なくなりになりました」

「……えっ？ ん？ つと〜〜（思い出し中〜）」

あごに手を当てて考えてみる。たしか記憶を失う直前は……

「えーっと何だったけ？？ あっそうだ。取引先に直行するので電車に乗るためにホームで並んでたんだよな？ 確か小学生くらいの子が誰かに後ろから押されて、それで線路に落ちそうになっているのを見たんだ。急いでその子の手をつかんで引っ張り戻した反動で……」

そう、ホームから転落したんだった。

「はい、そうです。思い出しましたね」

あー、あのときに……ってよく見たら俺の服、白装束しろよぶくって言うんだっけ？ 時代劇に出てるお化けばけがよく着てる着物だよこれ。

「そーか死んじゃったかー、まいつか」

俺の反応が変だったみたいで、女神様がぐすりと笑う。

「軽いですね、未練みれんとかないんですか？」

「ないってことはないですけどね……あ、そうだ、小学生どうなりました？」

「貴方が助けた子は無事ですよ。ちよっと手のひらを擦すりむいた程度でした」

「そっかよかった。じゃあ、あと心残りは……あー、自宅のハードディスクだけが……」

ハードディスクには他人に見せられないデータがわんさか入っている。あれが見られたら死んでも死にきれない!

「あーそれですね。田中さん、貴方にお願いがありました。もし引き受けてくださるならハードディスクは何といたします」

「やります! やらせてください!」

悪そうな笑みを浮かべる女神様。

「ふふふ……そう言ってくださると思ってきましたよ。大体の方はハードディスクの話を持ち出すとお願いを聞いてくれ……ゲフンゲフン」

何か咳で誤魔化した。

「では田中さん、貴方には異世界アルデンドに行ってもらい……」

「行きましょう」

かぶせ気味で即答してしまった。

「……話が早くていいのですが……」

若干引き気味の女神様である。

しかし俺はそんなことなど構わず、女神様の手を握ってまくしたてる。

「チートは、チートは何ですか? 選べるのですか? ポイント制ですか? サイコロとか振るのですか? むしろ何ートですか?」

女神様は、俺に握りしめられた手を振りほどき、冷静に言う。

「落ち着いてください。何ですか何ートって?」

「す、すみません。ちょっと我を忘れてしまいました」

生前愛読していた異世界転生モノの小説の知識が溢れ出てしまった。反省していると女神様が告げる。

「田中さんに与えられる能力は自身で選ぶことができます。ではさっそくですが、このリストの中から選んでください」

おー、何もないところからリストが出現した。

「フムフム……おく結構ありますね。どれどれ、聖剣保持? 全属性魔法取得、精霊魔法、武器錬成、防具錬成、おお、生産系もあるのかー。でも一番目を引くのはやっぱりこれかな。この光魔法って、回復系の魔法のことですか?」

リスト内の光魔法を示して女神様に尋ねてみる。

「そうです。それにしますか?」

「はい、それをお願いします」

「……意外とあっさり決めましたね?」

少し照れながら俺は返答する。

「あー、異世界行くなり手にする能力はこれって決めてましたから」

光魔法を選んだのにはちよつとした理由があつて、それは初めてやったMMOのゲームに由来している。

そのゲームで俺は、回復魔法を使ってあげたときに感謝されたのが嬉しくて、回復のできる魔法使いばかり使っていたのだ。まあ、戦闘が苦手だつていうのもあるんだけど。だから、小説みたいに異世界に行けるようなことがあれば、回復魔法を使う人になろうと心に決めていたというわけだ。

「フフフ……早くて助かりますね、じゃああとは女神異世界セットを……」

「えっ！ 女神異世界セット？」

「はい、異世界言語翻訳と異次元収納と、もちろん鑑定も付けちゃいますね」

「おおー!! わかつてる！ さすが女神さんだ！ いいな女神異世界セット」

こおど
小躍りしていると、女神様は少し真面目な顔になる。そしてゆつくりと告げた。

「田中さん、アルデンドでは命がとても軽いものになっています。モンスターがはびこり、治安が悪く、怪我や病気であつて命を落とすのです。そのため、この世界の人々はすぐに死んでしまいます。種族の違いはありますが、人の平均寿命は40歳程度。平均なのでもつと歳を召した方もいますが……」

俺は何となくわかつてしまった。

「原因は、子供の死亡ですか？」

「そうですね。田中さんには選んだ回復魔法のスキルで、この世界の平均寿命を伸ばしてもらいたいなと思つてます」

「もしかしたら、俺がこのスキルを選ぶのを、初めからわかつていたんですか？」

「じゃなかったら、俺をアルデンドへ転生させないんじゃないかな。」

「何となく、ですかね。でも、きつと選んでくれるだろうな、くらいは思つていました。でも、貴方ならきつと、どんなスキルを選んでも、多くの人を助けてくださるだろうとは思つていましたよ」

俺の性格のことまでずいぶんと知つているようだ。

「フフ、腑に落ちないって顔していますね？ 貴方のことをいろいろと知つているのは、私が女神だからですよ。それと、そんなに畏まらないでくださいね。これからは田中さんのやりたいように、生きたいようにしてください」

女神様は、慈愛に満ちた優しい顔でこちらを見ていた。

俺は、なぜか敬礼してこう叫んだ。

「はい……この世界の平均寿命を頑張つて伸ばします。」

最後の句点は「マル」と呼んだ。

そんな俺を見て、女神様は嬉しそうに笑って「お願いしますねっ」と言ってきた。そして、少し恥はずかしそうに話します。

「妹の手助けをしてほしいんです」

「妹さんの」

「はい、アルデンドの管理をしているのが私の妹なのです」

「ああ、なるほど」

と言ってみたものの、よく状況が呑み込めていない。

「では、妹の元に送りますね。田中さん、二度目の人生を楽しんでください。アルデンドは若くとも美しい星です。貴方の未来に幸多からんことを」

「はい！ ありがとうございます」

反射的に、女神様に向かって営業回りで鍛えた完璧なお辞儀を披露すると、俺の体は消えていった。

2 やっと地上に着いた

今度は普通の部屋のようなのだが……いや普通といっても、どこかの豪邸の一室みたいな感

じがする。そんな感想とともに呆ぼうけていると、後ろから声をかけられた。

「あ、いらっしやいませ」

なんとなく、元氣というかやる気のない感じの声だ。

振り向くとそこにいたのは、地球の女神様と同じゴールドの髪と瞳の女性だった。だが、サイズが小さい。

うん、いろいろと小さい。

「……今度の女神様は小さい……って、ここも心の声タダ漏れなんだ」

小さな女神様は少し機嫌きげんを悪くしたようで、ぶりぶりして言う。

「この見た目は通常用です。営業用の大人バージョンは別にあります」
「しまった！ ここで女神様に嫌きらわれてしまったら大変なことになる！

そこで俺は考えるより早く、営業で鍛えたスキルを発揮はっさせた。

「え、そうなんですか！ ぜひ見たいです。今でもこんなにかわいらしいのに、大人バージョンになったら、私きつと正気しょうきでいられないかもしれません！」

営業スマイルで相手を安心させ、さらに話術で信頼を勝ち取るというやつである。より正確には、営業というより実店舗じとてんぽの販売応援のときに駆使くししたスキルかな。

でも、もはや販売トークというより太鼓持たいこもちだこりゃ。わざとらしすぎたかな？ と思ったのだが……

「め、め、女神ですから我は美しいのじゃよ。営業用を見せるのは今はちよつと恥ずかしい……ゲフンゲフン。教会に我の像があるのを見ておくがいいぞよ」

女神様は真つ赤な顔をしていた。

「チヨロイン……なんか、キャラ壊れてるな？」

もう思考がダダ漏れになるのはわかっていたので、後ろ向きでつぶやいておいた。ちなみにチヨロインとはチヨロいヒロインのことである。

さらに営業挨拶を続ける。

「見られなくて残念です〜。あ、私、地球から来ました田中英信です。よろしくお願ひいたします」

ピシッとお辞儀を決める。

「む、地球から……」

小さな女神様がそう言った瞬間、俺の白装束の袖口から光の球が現れた。そしてその光は、小さな女神様のほうにゆっくり向かっていき、目の前で弾けた。

小さな女神様の驚いた顔が、段々と地球で見た女神様の顔と同じように、優しい雰囲気になる。

「ありがとう、お姉様」

小さな女神様はそうつぶやくと、突然、真面目な顔になって見てきた。

「お姉様のメッセージを受け取りましたわ。ようこそアルデントへ、貴方を歓迎いたします。貴方がそのスキルを選び、この世界に来てくださったことに感謝します」

今度は俺が顔を赤くする番だった。
 今度俺が顔を赤くする番だった。
 と思つたら、小さな女神がまたバタバタします。なんかキャラがぶれぶれだな。

「でも、貴方は戦闘スキル何も持っていないのだけど大丈夫かしらね〜？ う〜んととりあえず、少し年齢若くしといてあげるね。あつそうだ、前どこかに経験値2倍のスキルがあつたはずなんだけど〜。倉庫かしら？」

小さな女神様は部屋を出ていきながら「どこだっけ〜」としきりにつぶやいている。なんかまたスキルをくれるみたいだ。

しかも――

「え!! 経験値2倍? なにそれ超チート来た〜。イッヤッホー」

経験値2倍っていえば異世界モノの王道チートだ。同じ数のモンスター倒しても、そのスキルを持つていれば成長スピードは2倍だもんな。

「フフ、ハーハハハッ、無敵系主人公目指しちゃうかー」

期待に胸を膨らませていたが、しばらく待ってみても戻ってこない。ずいぶん経つてから、髪の毛サボサのチヨロイン女神が帰ってきた。

「ダメ、ないわ〜。いつつから探してもない。見つからない」

「えーそんな〜もつとよく探してくださいよ〜」

思わずチヨロイン女神の肩をつかんで、激しく揺すってしまった。

さらに勢いあまって、小さな子を高い高いするように上下左右に振り回す。

「アワワ、ヤメロ〜。酔う〜」

そのとき、入り口からシヨタな天使が入ってきた。

天使は目を回しているチヨロイン女神を一瞥すると、俺に抗議するでもなく普通に話します。

「エリル様、そのスキルなら、こないだ来た勇者様にあげちゃいましたよ」

「ちよっと、私がこんな扱い受けてるんだから助けなさいよ」

天使さんの登場で我に返った俺は、チヨロイン女神を放してあげた。

チヨロイン女神が地面にお尻から落ちていく。

「痛ったーい。もー突然放さないでよー。ともかくあのスキル、そうだったっけか？ ……

ゴメンやっぱなしで頑張…」

「なんかください」

ここでもらえないのは損した気分だ。

「って…セリフかぶせてきたよ。期待させちゃったのこつちだしな〜、天使ちゃんなんかない？」



「う〜ん似たようなのがあったようなく……!」

天使さんはそうつぶやくと、額ひたいに手を当てて考え込みました。天使さんは何かチートの候補こうほを知っているらしい。

「それでいいからくれ〜、いやお願いしますすください」

そう叫なげんで、俺はまたさっきのように女神様の腰をつかんだ。

「わかったから、離れなさい〜。また振り回されたらまたまったものじゃないわ。まったく、で、あった？ 天使ちゃん」

天使さんは空中くうちゅうに手を突っ込んでゴソゴソやりながら、何か見つけたらしい。

「ありました！ すごい奥のほうにありましたよ。ハイ」

女神様は天使さんから紙を受け取ると、そのまま俺の額に当てて、ポンッと叩たたいた。

なんだこりゃ。

「ハイ出来上できあがり〜、じゃ〜頑張つてね〜」

手を振るチヨロイン女神。

よくわからないけれど、これでスキルが付与ふよされたらしい。いったいどんなチートなのだろう。

「ありがとうございます」

わからないにしても一応もらえたことだし、ビシッとお辞儀を決めた。すると、俺の体

はゆっくりと消えていった。

◇ ◇ ◇

「やっと地上に着いた」

周りを見わたす。

「部屋？」

さっきまでいた豪華ごうかな部屋ではなく丸太小屋？ 質素しつそな感じの。

……あれは？

目の前の壁かべに大きな紙が貼はつてある。そこにはこう書かれていた。

貴方が突然街に現れたら変な噂うわさが立つだろうから、森の中に建てた小屋に移動させました。ちなみに貴方が小屋から出た時点で、この小屋は消滅しょうめつします。

ひとまずドアを出て左に進みなさい。道に出ますから。

女神より

は？ 何これだけ？ このまま行くの？ 服とか白装束のままなんだけど？ お金も装

備もなし？ いきなりベリーハードなんですけどー！

膝をついて頭を抱えていると、後ろで何か落ちる音がした。

振り向いてみると大きな布の袋があった。

さっきまでなかったはずだけど……？ そう思いながらまた周りを見わたしてみる。壁に貼られていた紙に続きの文が現れた。

エリル様はいくらなんでも適當すぎるので、この世界の服と少しばかりのお金、それに武器や地図、この世界の常識が書かれたノート、その他を袋の中に入れておきました。

ぜひ使ってください。

天使より

マジ天使さんステキすぎー。

天使様に感謝しながら服を着替えて、お金や装備なんかを地球の女神様からもらったスキル異次元収納に入れた。

袋の中に革の鞆が入っていたので、それを肩からさげる。異次元収納がレアスキルすぎて目立ってしまったら嫌なので、ここから道具を出すふりをすれば良いだろう。

小屋から出てドアを閉めると、その小屋はフツと消えてしまった。まるで最初からそこ

には何もなかったかのように、草や木だけが生えている。

俺は小屋のあった方に一礼をすると、とりあえず歩き始めることにした。天使さんからもらったノートを見ながらとてくと歩く。

そこで今更、自分の体の変化に気づいた。なんか体軽いな、メタボチックな腹がすつきりしてるし、それだけでも気分がいい。

「あ、そうだ鑑定とかしてみよ」

どうするんだろ？ 対象物を見ながら「鑑定」とか言えばいいのかな？

そこから辺の草を見ながらやってみた。

「鑑定」

声を出してみる。すると草の上に情報が現れた。

【雑草】

どこにでも生えてくる。食用には向きません。

木に向かつて。

【木】

ちよっと大きい木。実がなくても食用には向きません。

蝶々ちょうちょうに向かつて。

【チョウチョ】

虫。食用には向きません。

食べられるか食べられないかばかり教えてくれるんだけど……

フム、俺腹減ってるのか？

ま、いいけどずいぶんいい加減かげんじゃないか？ 教えてくれる情報も全然少ないし。あ、

これはあれか、レベル上がると詳しくくわなっていくとかかな？

天使さんからもらった地図を確認しながら、鑑定をいろんなものにかけていく。

目に付くものすべてに鑑定をかけていると、特別目を引く植物があった。

「お、これ薬草なんだ」

改めて鑑定をかけてみる。

【薬草】

回復薬を作るための素材。単品では食用には向きません。

「おお、採取さいしゅしとこ」

根こそぎ採ったらいかんものだろうな〜と思い、間引く感じでいくつか残して採取した。

そのとき、横の茂みしげからガサガサと音がしたので慌あわてて音のほうへ顔を向ける。なんか

デカイ兎うさぎがいた。

角あるしデカイし、なんかかわいくない。

「あつ、そうだ。鑑定」

【ホーンラビット】

デカイ兎。食用です。

「情報少ないよ！ もっといろいろ出してよ」

鑑定に突っ込みを入れてるうちに、ホーンラビットが飛びかかってきた。

横よこっ跳とびにかわす。

「あつぶね！」

ガッツと、何か刺ささる音が聞こえた。後ろうしろを見ると、ホーンラビットの角が木に刺さっ

ていた。

慌てて異次元収納からナイフを取り出して、ホーンラビットの首のあたりを刺す。ホーンラビットはしばらくバタバタと暴れていたが、徐々に動かなくなっていた。

一応採取しておこう。皮剥ぎとかできないしもちろん解体もできないので、そのまま異次元収納に投げ込む。

「よし、初めての戦闘（？）も終えたし、町に向かいましょー」

独り言を言いながら、少し震える手を握りしめる。

実は、都会育ちの自分にとって、ホーンラビットくらい大きな生き物を殺すのは初めての行為だった。学生の頃、友人に豚の解体動画を見せられたことがあったけれど、それさえしつかりとは見られなかった。そんな自分がまさか、自分の手で生き物を殺してしまうとは。

だが、これからこの世界で生きていくのなら、こうしたことはきつと当たり前になっていくのだろう。

そう思って、俺は覚悟を決める。

すると、自然と震えが止まった。

震えの収まった手を見つめながら俺は、この世界で生き抜いてやる、そう誓うのだった。

3 冒険者

お日様に向かって決意を新たにしていると、またガサガサという音が聞こえてきた。

「決意を決めた私に、もう怖いものは何もない」

などと、フラグチツクなことを口にしながら音のほうに顔を向ける。

2匹いた！

さつきと同じホーンラビット。向こうもこちらに気がついたらしく、やる気マンマンの様子だ。

「えー、いくら決意ができたからついでいきなり2匹かよ」

と小声で言ってから、ナイフを逆手に持ち――

「俺は強い子、俺は強い子」

暗示をかけるようにつぶやきながら、熟練のボクサーのように左右に体を揺らす。そして「来い」と短く低い声を吐き出した。

2匹のホーンラビットは心得たというように飛びかかってきた。

じつくりと観察をしていた俺の目がギラリと光る。

「今だ！ そ〜い」
 横っ跳びにかわずと、すぐ後ろでガッガツと二度音が聞こえてくる。「ふ〜」と肺はいにたまった熱い息を吐き出す。
 また木に刺さっていた。

こいつらバカじゃね〜と思いつながら、プスップスツと初めのとくと同じように刺していく。ホーンラビットが動かなくなってからボックスに放り込む。

「レベルとかあるのかね？ 女神様は経験値とか言ってたし」

あと、ステータスとかはないのかな、この世界。どうしたらいいんだろう。

「あ、自分を鑑定すればいいのか、鑑定」

【名前】ヒデノブ タナカ

【レベル】 5

【スキル】 光属性魔法

異世界言語翻訳

異次元収納

鑑定

パーティーメンバー経験値2倍（発動中はスキル保持者は経験値×0.5）

「……ん？ 鑑定の説明が少ないのはいつものことだけど、スキルの最後に書いてあったの何？」

もう一度じっくり見てみる。

パーティーメンバーの経験値が2倍で、俺の経験値は半分しか入らないの？？

えつとつまり、1000の経験値の敵を倒したとすると、パーティーメンバーは2000の経験値が入るのに俺は50しか入らないってことか。

ちゃんと数字で考えてみたけど、ひどすぎるぞこれ。

「あ〜の〜チヨロイン女神め〜！！ 天使さんも適当すぎるよ！ これじゃ〜俺、仮にパーティーを組くんだとしても、パーティーのお荷物になるじゃん。カワイイ子とか奴隷どれのネコミミ娘とかとパーティーを組めたとしても守ってもらおう感じ？ 嫌だそれは嫌だ！ 俺の考えていたのとだいぶ違うよそれ〜」

どれくらいジタバタとしていたことか……

「まっいつか。これはこれで使いようはありそうだしな」

相変わらず切り替かえの早い男であった。

——と自分で思いつつ、何回かホーンラビットに出くわしながらも、ほぼ同じように倒していく。

しばらくすると街道に出た。地図を出して方向確認していると、道の向こうから馬車のがんびりと向かってくる。

少し手前で止まると、剣を持ち胸鎧を着けた男がこちらに歩いてきた。

うわく鎧カッコイイな。そう思っただけ目をキラキラさせていたら、男が話しかけてくる。

「ここで何をしている！」

「へ？ あ、薬草を採りに森に入ってきました」

少々不躰な物言いをされたが、男からあまり余裕が感じられず急いでいそうだったので、素直に答えた。薬草採りは目的ではなかったけれど嘘は言っていない。実際採ってたし。

「すまない、盗賊どもに襲われて仲間が怪我をしまして……薬草を採りに来たのなら薬師なのだろう？ 手持ちのクスリはないだろうか？ あれば売ってほしいのだが」

どうやら仲間が怪我をしていたから余裕がなかったみたいだ。

ふと地球の女神様のことを思い出す。ここは俺の能力、回復魔法の使い所じゃないだろうか。

「薬はないですが、少々回復魔法が使えます。怪我をした方はどなたですか？」

「え、回復魔法？ 教会の守銭奴か……ゲンゲン、教会の方ですか？」

「ん？ 違いますよ？」

教会の人間だと何かあるのか？ しかも何か言いかけていたけど？

「教会の人じゃないのか。ともかくお願いします。診てください。こっちは」
男の後に付いていく。

馬車に近づくと、御者台に乗った年配の男が声をかけてきた。

「アードルさん」

俺を連れてきたこの男、アードルっていうらしい。慌てていたから互いに自己紹介もしてなかったよ。

アードルさんが返答する。

「大丈夫、薬師の方です。ミーシャの怪我を診てもらうためにご同行いただきました」

年配の男は大きく頷くと顔を引っ込めた。

荷馬車の後ろに回ると、そこには年若い女性が苦しげな息を吐きながら横たわっていた。

「ポーシオンも効かなくて……」

女性の隣で痩せ型の男がポツリとつぶやく。この荷馬車には三人の冒険者と商人らしき年配の男一人が乗っているようだ。そして、冒険者の一人が怪我をしていると。

俺は頷いてから女の人に目を向ける。かなり苦しそうだ。鑑定で状態がわかるかもしれないと思い、心の中で「鑑定」と念じる。

【名前】ミーシャ

【レベル】15

【状態】毒

毒かー。毒だったら、それを浄化させればいいはずだよな？

あれ？ そういえば、どうすれば魔法を発動させられるんだ？ 「回復魔法が使えます」なんて言ってしまった手前、今更でできませんとか言えないし。

思いつきで、毒が入り込んだと思われる傷口に手を当てて「ブットアウト」とつぶやく。

これはよくやっていたMMOの解毒の呪文だった。

しかし、何も起きない。

あ、あれ？ やばい、どうしたらいいんだ？ えっと、そうだ。イメージだ。異世界物

の魔法はイメージが大事なんだよ、きつと。

血液から毒が浄化されていくようなイメージをする。周りの空気が重くなってきたのを肌で感じながら、もう一度唱えてみる。

「ブットアウト」

口にした途端、軽い頭痛とけだるい感じがした。

次の瞬間、ミーシャさんの身体が青白く光ると、何かが飛び出て、そのまま消滅した。

ミーシャさんの顔を見てみると、苦しげだった顔が安らいだ感じになっていた。

もう一度鑑定をかけてみる。

【名前】ミーシャ

【レベル】15

あ、状態の項目が消えたから毒がなくなっただってことでもいいのかな？

うん、良かった。助けられて。

「薬師様ありがとうございます。ありがとうございます」

アードルさんが俺の手を握って、ありがとうございますを連発してくる。

あーそういえば、あのMMOの最初るときも、毒で死にそうになってる人に毒消しをかけてあげたんだっとなー。

俺は喜ぶ二人を眺めながら、そんなことを思い出していた。

4 宴うたげ

「起きられるか？ ミーシャ？」

アードルさんにそう問われたミーシャさんは「うん」と答えながら、上半身だけを起す。アードルさんと俺は、おーっと大げさに感嘆かたんの声を上げてしまった。

そんなふうに残まわりで騒さわがしくしていたら、御者台に乗っていた年配の男が荷馬車にやつてきた。

「お、ミーシャさんよくなったのかい？ よかったよかった。それで、暮くれるまで時間があまりないですし、町までもうすぐだ。町でゆっくり話したらどうです？」

年配の男性は少し焦こもっている感じで話した。

アードルさんは年配の男性に向かって頷く。

「確かにそうですね。薬師様にお礼をしなければいけないんですけど……見たところほとんど手ぶらですね。近くの町からいらしたんですか？ 戻られるのなら、このまま一緒に行きませんか？」

町まで連れてつてもらえるのはありがたいな。

「わかりました。ご同行します。でも、私は町から来たのではなくて町に向かっている最中だったんです。あと、手ぶらではなくて、荷物はこの『アイテム袋』に入ってます」

俺がここで言った「アイテム袋」とは、この世界においてダンジョンや遺跡いせきから発掘はっくつされる道具だ。容量の多さで値段が決まり、貴重だがお金で買えるらしい。これは天使さんがくれたノートに書いてあった。

「ほー、アイテム袋ですか？」

年配の男が食い入るように見ている。

「はい。と言っても、このぐらいしか入りませんけど」

そう言っただ俺は、地面に1メートルくらいの四角形を描かく。

「いやいや、商売をやっている者からすれば、羨うらやましい限りですな」

グイグイ迫せまってくる年配の男。

「う、売りませんよ」

「ま、そうでしょうが、もしも手放てばなすことがあればぜひ私に売ってくださいね」

御者台に戻りながら年配の男は「ぜひ、ぜひ」を繰り返く返かっていた。

ごめんよおっちゃん。これタダの革の袋だから売っても意味がありませんよ……俺が、異次元収納を持っているのを隠かくすために言った咄とつ嗟さの嘘うそだし。

それから荷馬車の左右に一人ずつ人を配置して、荷車にはまだフラフラしているミー

シヤさんに乗せた。ミーシヤさんは座っていても後ろの警戒ならでできるそうだ。俺は、彼らの仕事の邪魔をしないように、その斜め後ろから付いていった。

2時間ほど歩いていくと、背の高い木製の壁が見えてきた。

映画やゲームなどで見る城壁とは迫力が全然違う。こうして肉眼で見ると、高揚感が格別だ。

目をキラキラさせてキョロキョロしていると、ミーシヤさんが笑いながら聞いてきた。

「町は初めて？」

俺は門に釘付けになりながら答える。

「うん、すごい田舎育ちだから、こんな建築物はなかったんだ。すごく珍しいよ」

町へ入る手続きの列はそんなに混んでなかったので、すぐ自分たちの番が来た。アードルさんたちは門番の衛兵と顔見知りのようだ。二言三言話すと、カードみたいなものを球にかざして門をくぐり抜けていく。

入るにはカードが必要なのか。

「カード持っていないのですが……」

嘘を言っても仕方ないので正直に話した。

「あ、はい、じゃあこの水晶球に手をかざしてください」

言われた通り水晶球に手をかざすと、2秒ほどで済んだ。手続きが完了したらしい。

「はい、結構です。じゃあ通行料は銀貨1枚です」

「はい」

ポケットから銀貨1枚を渡す。

「次からは、冒険者ギルドか商人ギルドで登録してカード発行してもらおうといい。そうすればタダになるからな」

「はい」と答えてから、アードルさんたちが待っていてくれるところに向かう。荷馬車を停めるスペースがなかったので、商人のおっちゃんは先に行つたみたいだった。

護衛クエスト(?)もこれで終わりのようだ。

俺を見つけたアードルさんが話しかけてくる。

「これから冒険者ギルドに護衛の報告に行くんです。ギルドでカード作るのなら案内しますよ?」

初めての町で地図もないので、案内してもらえるのは助かる。考えるまでもなく答える。

「はい、お願いします」

三人の後ろに付いていく。

「ミーシヤさん、お身体の具合どうですか? 気持ち悪いとかありませんか?」

歩きながら聞くと――

「もう全然平気。なんか逆に調子いいかも」

ムンと力こぶを作る真似をして見せるミーシャさん。

「薬師様、本当にありがとな」

アードルさんがニッコリと笑いながら言う。なんだか薬師様って「様」付けされるのは気恥ずかしいし、そもそも俺は薬師じゃない。

「いいえ、それより私のことは英信と呼んでください」

「ヒ、ヒデノブ？」

「呼びづらかったらヒデでいいです。あと、年齢もそんなに違わなそうだし、敬語じゃなく普通に話しませんか？」

「わかった、俺はアードル」

「イールだ」

名前不明の痩せ型の男はイールという名前だったようだ。

「あらためてミーシャよ、よろしくね」

「こちらこそよろしく」

夕方近くになって冒険者ギルドにたどり着いた。時間帯のせいもあってか、酒場兼冒険者ギルドは大賑わいだった。

アードルさんは護衛クエストの完了書を提出しに行つてすぐに戻ってきた。

そしたら俺の背中を叩く。

「今日は混んでるから、冒険者登録は明日にして、まずは飲もうぜ」

ま、嫌いじゃない。今を楽しくだな。

この世界はいつ命を落とすかわからない。ならば今を楽しむか。

「ん、何だ、ヒデ嬉しそうだな」

「ん、いや、そうだな。俺は今を楽しむぞ、って思っただけだ」

アードルさんたちがなんじゃそりゃ？ みたいな顔をしているけど、気にしないで酒場に向かう。

酒場の四人席に座ってエールで乾杯した。

なんか久々にお酒を飲んだ気がする、料理がどんどん運ばれてきて、唐揚げのとか煮物っぽいのとかパスタっぽいとかいろいろ来た。

旨い旨い！

飲んじゃ喰い、喰っちゃ飲んだ。

お腹いっぱいだ。

「ヒデ、宿決まってるないだろ？ 俺たちの泊まってるここ来いよ」

断る理由もないので素直に付いていく。

宿はギルドのすぐ裏にあった。

「いらつしやいませ〜お泊まりですか？ お食事ですか？ ってアードルさんたちお帰りなさい」

カウンターから元気な女の子の声が届こえた。

「お、ただいまー。今日からまたお願いね」

「はい、いつもの部屋で大丈夫ですよー、そちらの方は？」

「宿探してるって言うから誘ったんだ」

急に俺に話が振られたので、慌てて挨拶する。

「ヒデといいます。よろしくお願いします」

「こちらこそ。鹿の角亭にようこそ、お泊り一晚銀貨5枚です。食事のお金は別で、その都度いただきます」

「じゃとりあえず2日お願いします」

そう言って俺は銀貨10枚を渡す。

「はい確かに、お部屋はアードルさんたちの隣です」

「はいどーもー」

鍵を受け取ってアードルさんたちについていく。客室の前で彼らと別れて、部屋に入ると俺はすぐ寝てしまった。

5 ギルド(1)

「うん？ まぶし……」

太陽の光に目を細めながら周りを見わたす。

「えっ！ ここどこ?? えっ？ あれ？ あ、そうだ、そうだった」

夢じゃなかったんだよな？

ベッドから起き上がり身なりを整えると、下の食堂に行ってみた。忙しく働いていた昨日の女の子に挨拶をする。

「おはよう」

「おはようございます。朝ごはんどうします？ 銅貨5枚ですよ」

銅貨5枚を出して、そのまま手渡した。

「お願いします」

「はい、好きなどこ座ってください」

女の子は銅貨をポケットに仕舞うと、厨房の中に入っていった。

適当な席に座って周りを見わたすと、昨日のアードルさんたちのようにアーマーを着て

いたり、しつかりとした武装をしていたりする者たちが多くいた。彼らの種族は様々で、ずんぐりとしたドワーフ、犬や猫の耳と尻尾がついた獣人、中には顔までほとんど獣の姿をした者さえいる。

「うわあ、熊そのものなのにしゃべっている人がいるよ。さすが異世界」

「お待ちせしました」

独り言をつぶやいていたら料理が運ばれてきた。コンソメスープみたいなのと、ペーコンモドキ、そして黒パンがテーブルに並べられていく。おいしそー。

「いただきます」

手を合わせてそう言うてから食べ始める。

昨日ホーノンラビットの命を奪ったこともあって、こういう食前の感謝の言葉がより一層大事に思えた。だから何となく、ちゃんと言わなければ気が済まなくなつたのだ。

食べ終わってから、厨房に「ご馳走様」と声をかけて、冒険者登録のためにギルドに向かった。

◇ ◇ ◇

朝のギルドは喧騒に包まれていた。クエストは早い者勝ちなので、駆け出しの冒険者は

朝早くに来るそうだ。

当然、受付も並んでいる。昨日のうちに済ましたほうが良かったんじゃないかな。

「うーん、少し減るの待つかな」

ブラブラとギルドの中を歩き始める。どんなクエストがあるか気になるので、ワクワクしながら掲示板のほうに歩いていく。

掲示板は大きく二つに分かれていた。人の少ないほうが上位ランクのクエスト。たくさん人が集まっているほうが下位ランクの掲示板らしい。

邪魔にならないように後ろから見ている。ここで、上位ランクの掲示板に近づいて「おいおい、ここはお前みたいなひよっこが受けるようなクエストはないぜーヒャーハッハッハー」っていう、よくあるテンプレイベントは発生させないぜ。

俺と同じように遠く離れた位置から掲示板を見ていたおっちゃんが、チツと舌打ちをした。たまたまそっちのほうを見たら目が合ったのだ。そのおっちゃんが近づいてくる。

む、絡まれるのか、と身構える。

「どうした、クエスト受けないのか？ いいのなくなっちゃうぞ」

「おっちゃんこそ受けないんですか」

「受けるよ、ただ若い奴らの邪魔したくねーしな」

そう言うておっちゃんは、再び掲示板を眺めている。

立ち読みサンプル はここまで